

黄色いやび

真柄慎一 (東京都小笠原市/33歳)

今から数年前。春から秋にかけての半年間。僕は日本縦断、釣りの旅をしていた。六月と七月の丸々いつばいを北東北で釣りすし謳歌した。初夏の東北、新緑のさわやかな風から「むわっ」と緑むせる、ちょっとした季節の変わり目。どこに入っても魚は釣れそうだった。

遊漁券販売所、のノボリを見つけ、路肩に車をとめる。いかにも田舎の販売所って感じで、開店中なのか閉店してしまっただのか雑貨店なのか食料品店なのか、よくわからない店構えをしている。

そっと古びた木製の引き戸を開けてみた。「こんにちは。」

テレビの大音量だけが聞こえる。今度は大きな声で「こんにちは。」

テレビの音量が小さくなった。気付いてくれたか半信半疑だった僕は、さらに大声で言った。

「す・い・ま・せ・ん。」

「はー。」

腰の曲がったおばあちゃんが急いで出てきてくれた。

「すみません。大声出しちゃって。」

「ごめんなあ〜耳遠くてなあ〜。」

「いえいえ、遊漁券ください。」

「鮎っ子が。」

「いえいえ、雑魚ください。」

「雑っ子が、ちょっと待ってるなあ〜。」

この時期、雑魚の遊漁券は売れないらしく探すのに手間取っている様子だった。

地元の釣り師たちは、五月くらいまで溪流で餌釣りして六月になると鮎釣り専門となる。六月に溪流釣りじゃあ、もう遅いと思っている節があるのだ。

おばあちゃんの答えはもうわかっていたが聞いてみた。

「イワナとヤマメは今の時期どうですか。」

「なあぬ、今ごろ〜もう遅いべえ〜。みな鮎釣りだあ〜。」

「そうですか。フライにはいい時期なんだけどなあ。」

「フライってなんだあ〜カタカナ言われでもわがんねえ〜よ。オラは東北弁専門だからなあ。」

「おばあちゃん、フライって毛鉤のことよ。」

「はっはっ、そうがい。毛鉤は毛鉤っていつてくれねばわがんね〜よ。」

「すみませんね〜。」

おばあちゃんがやつと遊漁券を見つけて渡してくれた。

「カタカナ使うってことは東京が来たのげえ〜。」

おばあちゃんからしたら僕が都会の人に見えたのだろう。標準語を話し「フライ」なんていつているし、目深なハンチング帽に偏光グラスをかけている。ましてや日中の平日に釣りなんかやっている。

地元の若者にこんなやつはいない。

おばあちゃんのびっくりした顔を想像しながらニンマリと言っ。

「そうです。東京からです。でも生まれ育ったのは山形なんです。」

「なあに〜隣の県でないがい。」

やはりおばあちゃんはびっくりしていた。

「ほほお〜う、んだらアンタも東北弁専門だったのがいっ」

「んだよ、んだよ。」

「たまげだなあ〜、あんたの得意のカタカナでそういうのなんていうだっけがあ。」

「ネイティブがな。」

「なあにつて、ネイティブ。」

「んだ、んだネイティブらあ。」

こういった田舎の遊漁券販売所は僕にとって「憩いの場所」だった。

地元のじつちゃん、ばあちゃん。とつちあん、かあちゃん

と僕の母国語である東北弁で話しができるのだ。

ひとり旅の身である。話し相手がいらない。わざわざ古び

たノボリを探し、それっぽいお店を見つけ券を求めている。

川さがし、魚さがしよりもノボリさがしがうまくなった。

東北での釣りもあとわずかかってとこまで来ていた。真夏日が続く、夕方だけにいい時間が集中していた。イブニングライズに期待し川を見まわっていると、それっぽいお店を見つけた。

入り口はやはり木製の古びた引き戸だ。戸を開けると独特のにおいがした。こういったお店はどこも同じにおいがする。なんのにおいなのかは分からない。

洗剤やらホウキやら缶詰やらカップラーメンやらが置いてある。奥の隅にはちょっとした釣り具も置いてあった。



東北行こう!

特集◎